



「信じて、任せる」環境が人を育てる！

ある朝、登校途中で転んでしまい、おでこを打ってけがをした1年生を、6年生がそっと守るように連れて登校してきました。1年生のおでこには、絆創膏が貼られていました。

6年生に「手当してくれたの？」と尋ねると、「登校中に何かあったら手当してあげるようにと、母から絆創膏を渡されているのです。」と。その6年生が、当たり前顔でさらっとそう話すものですから、おでこにきれいに貼られた少し大判の絆創膏を見ながら、ただただ感心し、玄関に向かう後ろ姿に何度も「ありがとう」と声をかけました。けがをした1年生は、さぞかし心強かつたでしょう。そして、一緒に登校しているその6年生の妹は頼もしい兄の姿を見て、きっと「自分も上級生になつたら…」という思いをもったことでしょう。

息子を信じて、自分よりも小さな子にやさしく接してほしいと願い、絆創膏を託したお母さんの思い(環境)が12歳の少年をこんなに頼もしく育てたのだと感じる出来事でした。



2年生が、生活科の学習の中で、自分たちが作ったゲームで楽しんでもらおうと1年生を招待する集会を開きました。

朝、出会った2年生の一人が、「校長先生、今日の3限の生活科で1年生を呼ぶことになっているんだけど、僕はね、『いらっしやい』の係なんだ。」と嬉しそうに話すのです。一瞬、『いらっしやい』の係？と考えましたが、担任時代の経験から、「お店屋さんだな」とすぐに察しがつきました。

2限の終わりごろ、何やら中央階段を上っていく子供たちの足音がしたので見てみると、手作りのゲームを手に、張り切って準備に向かう2年生の姿がありました。どの子も胸を張り、自信にみなぎった表情です。きっと1年生の喜ぶ姿を思い浮かべながら準備をしてきたのでしょう。こちらまでわくわくしてきて、チャイムと同時にカメラを持って、会場に行きました。

すると…。そこには、無邪気な笑顔で手作りのゲームを楽しむ1年生とちょっぴりお兄さん・お姉さんの顔になってお世話をする2年生の姿がありました。互いに顔を寄せ、1年生に分かるように説明したり、手作りの景品を手渡して喜ばせたり、『いらっしやい！』と声をかけて盛り上げたり。大人が手助けすることなど一切ないその空間で、縦割りの活動を通して、人と人がやさしい気持ちで楽しく関わることの心地よさを学んでいくのだなと改めて感じて、幸せな気持ちになりました。



校長のひとりごと

今から10年以上前、担任していた子供から言われた言葉が今でも私を支えています。

その子は、今は立派に成長し、爽やかな社会人になっているのですが、小学校時代は、悩み多き少年でした。いろいろとトラブルを起こすたび、その子の憔悴した顔を見ると「ああ、辛いのだろうな。」と感じ、でも、私はその子の背中をどんと叩きながら、「大丈夫、大丈夫。」と声をかけるしかできませんでした。どんな時も「大丈夫だよ。」と。きざに聞こえるかもしれませんが、その時、本当にその子を信じて「大丈夫だよ。(君は素敵だよ。)」と言い続けていたのです。卒業式の後、その子が私に「先生が、大丈夫って言ってくれたから頑張れた。」と伝えに来てくれたのです。もう、号泣でした。自分の、あんな頼りない「大丈夫」の一言が、この少年の支えだったなんて思いもしなかったからです。子供にとって、心底信じられているという感覚は、希望をもって生きていく支えになるのだなと、その子から教えられたのです。「きっと大丈夫」

